

## 名作再読、拾い読み(10)

『ティファニーで朝食を』 ("Breakfast at Tiffany's")

小澤 文彦

トルーマン・カポーティ (Truman Capote, 1924-1984) はアメリカの小説家で、ニューオーリンズ出身です。両親は彼が4歳の時に離婚したので、親戚の家を頼ってアメリカ南部を転々として育ちます。10代の時に作家になる決心をし、高校卒業後はタップ・ダンサーや古い師の仕事に就き、次いで、「ニューヨーカー」誌の雑務係になりました。21歳の時に短編小説『ミリアム』を発表しますが、この作品は高い評価を受けてオー・ヘンリー賞を受賞し、「アンファン・テリーブル (恐るべき子供)」と評されます。その後発表した長編小説『遠い声、遠い部屋』(1948)は大好評を博し、「アメリカで最も輝かしい新星」と呼ばれました。そして、中編小説『ティファニーで朝食を』(1958)がベストセラーになり映画化されてヒットすると、社交界でもはやされるようになりました。1966年に発表した『冷血』では、カンザス州で起こった一家惨殺事件を題材にして「ノンフィクション・ノヴェル」という新しいジャンルを開拓します。この作品も記録的なベストセラーとなり、映画化されました。

1970年代後半からはアルコールと薬物中毒に苦しんで入退院を繰り返し、執筆中だった最後の作品『叶えられた祈り』(1986年没後刊)を完成することなく友人宅で急死しました。

今回は、『ティファニーで朝食を』をお薦めしたいと思います。

ある駆け出しの若い作家の回想で物語が展開していきます。舞台は1940年代のニューヨーク。彼の引っ越してきたアパートの真下の部屋には、モデルなのか女優なのか職業がはっきりしない19歳のホリー・ゴライトリが住んでいました。ホリーは夜遅く帰ってきては、その度に鍵をなくしたと言い訳して、他の人の部屋の呼び鈴を鳴らすという人騒がせな人間です。若い作家と親しくなったのは、彼女が嫌な男から逃げて彼の部屋に非常階段を伝って飛びこんだことがきっかけでした。

一緒に住んでる猫に名前を付けていない理由や、不安に襲われた時、ティファニーに行けば安心できることなどを打ち明けます。ホリーは片付けが下手で、ごみためみたいな部屋に住んでいながら外出する時は唖然とするほど見事な着こなしの美女に変身します。化粧室へ行く時や帰宅する時に50ドルをチップとして手渡してくれるような裕福な男たちと付き合っていて、生活に困るようなことはありません。

ある日、ホリーの夫だというテキサス男が訪ねて来たことから、ホリーというのは本当の名前ではなく、彼女は孤児であり、獣医のドクに助けられて14歳で彼と結婚したことが明らかになります。しかし、彼女はドクのもとに帰らずニューヨークに留まります。

暫くしてから、ホリーはブラジルの外交官ホセと知り合い、結婚してブラジルへ行くことになりました。しかし、出発も間近に迫った時、彼女は突然逮捕されます。シンシン刑務所に入っている国際麻薬密輸組織のボスに定期的な面会に行く仕事を頼まれ、知らないうちに連絡係に仕立てられていたのです。ホセはスキャンダルになるのを恐れて彼女のもとから立ち去ります。それでもホリーは、自分の猫の世話を作家に頼んでブラジルへ旅立ちます。

自由奔放に生きるホリーが本当は繊細で傷つきやすい孤独な心の持ち主であり、周囲の男達が報われないのを知りながらも彼女に優しい眼差しを向けている温かさが感じられる作品です。

## 参考文献

1. "Breakfast at Tiffany's" (Penguin Books in association with Hamish Hamilton, 1961)
2. 『ティファニーで朝食を』  
村上春樹訳 (新潮社, 2008)

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)